

明王朝復活にかけた 鄭成功

竹村 紘一

大明天啓4年7月14日（1624年8月27日）～大明永曆16年5月8日（1662年6月23日）
中国明代の軍人、政治家。元の諱は森（しん）。字は明儼（めいげん）。日本名は福松。「反清復明」をスローガンに清に滅ぼされようとしている明を擁護し抵抗運動を続け、後に台湾に渡り鄭氏政権の祖となった。俗称を国（こく）姓爺（せんや）。台湾・中国では民族的英雄として描かれており、特に台湾ではオランダ軍を討ち払ったことから、孫文、蒋介石と並ぶ「三人の国神」の一人として尊敬されている。鉄人（鉄の甲冑を着込んでいたための呼び名）や倭銃隊と呼ばれた日本式の鎧を身に纏った鉄砲隊や騎馬兵などの武者を巧みに指揮したことでも有名。本邦でも近松門左衛門が人形浄瑠璃「国性爺合戦」を創作し、後に歌舞伎でも上演され評判となった。

人物・来歴

日本の平戸で父・鄭芝龍と日本人の母・田川松の間に生まれた。成功の父、芝龍は大陸の福建省の人で、平戸老一官と称し、時の第二十八代藩主松浦隆信の寵を受け川内浦に住み、浦人の田川松を娶り二子を生んだ。二人に、福松と七左衛門と名付けた。たまたま、母・松が千里ヶ浜に貝拾いに行ったところ、俄に産気づき家に帰る暇もなく、浜の木陰の岩にもたれて出産した。この男児こそ、幼名福松であり、後の鄭成功である。千里ヶ浜の南の端に鄭成功にちなむ誕生石がある。幼い頃は平戸で過ごす、七歳の時に父の故郷福建に連れて来られる。鄭芝龍の一族はこの辺りのアモイ（廈門。福建の南部）などの島を根拠に密貿易を行っており、政府軍や商売敵との抗争のために私兵を擁して武力を持っていた。十五歳の時、院考に合格し、南安県の生員（中国明朝及び清朝において国子監の入試（院試）に合格し、科挙制度の郷試の受験資格を得た者のことをいう）になった。明の陪都（国都に準じる扱いを受けた）である南京で東林党（中国、明朝末期の江南の士大夫を中心とした政治集団・学派）の錢謙益に師事。

明の滅亡

1644年、明に反乱を起こして、既に新順王と称して大軍を率いていた李自成が北京に迫った。李自成軍の包囲の前に崇禎帝（すうていてい）は自殺し、明は滅亡、李自成が大順を建て自ら新皇帝（順）を名乗る。都を逃れた旧明の皇族たちは南では南明を建てて対抗した。鄭芝龍らは唐王朱聿鍵（しゅいつけん）を擁立したが、この時、元号を隆武と定めたので、朱聿鍵は隆武帝と呼ばれる。

新皇帝順（李自成）はそれまでは軍規が厳正であり民の支持を得ていたが、北京入城後は雑多の勢力を糾合したことから軍規が乱れ、略奪や暴行や殺人が横行したことにより民心が離れたことや、東北地方では満州族の清に対して、精兵を率い前線の重要拠点である山海関（さんかいかん）を守って

いた明将呉三桂が清に投降して剽悍な清の軍勢を引き入れたことにより、遂に李自成は敗れて北京は落城して李自成は逃亡中に殺された。

李自成の評価については様々な議論がなされている。李自成を滅ぼして北京に入った清は崇禎帝の葬儀を手厚く営み、李自成に殺された崇禎帝の仇を取るとの名目を持って自らの漢地支配を正当化した。このために清代を通じて李自成は反逆者とされ、辛亥革命によって清が滅亡した後もしばらくは流賊の頭とみる低い評価が続いたが、1944年になって郭沫若が李自成を起義軍として再評価する論を唱えた。毛沢東も当初は流賊説を取っていたが、郭沫若の論を承けて李自成を農民反乱指導者として評価する見解を出したことから、李自成の再評価と順王朝の研究が進められるようになった。また、明将呉三桂が清軍に山海関を明け渡し清軍と共に北京へ進撃したことについても議論があるところである。

話を戻すと、中原に女真族の流れを引く満州民族の王朝が立つことは覆しがたい状況となり、隆武帝の政権は清の支配に対する抵抗運動にその存在意義を求めざるを得なくなった。

そんな中、ある日、鄭森（後の鄭成功）は父の紹介により隆武帝の謁見を賜る。帝は眉目秀麗でいかにも頼もしげな鄭森のことを気に入り、「朕に皇女がいれば娶わせるところだが残念でならない。その代わりに国姓の『朱』を賜ろう」と言う。それではいかにも恐れ多いと、森は決して朱姓を使おうとはせず、自ら鄭成功と名乗ったが、以降、人からは「国姓を賜った大身」という意味で「国姓爺」（「爺」は老人ではなく「御大」や「旦那」の意）と呼ばれるようになる。尚、近松門左衛門の作品では、国姓爺ではなく国性爺となっている。近松の作品は脚色が多く史実と異なる部分も多いので敢えて「姓」を「性」に変えたと思われるのである。

隆武帝の軍勢は北伐を敢行したが大失敗に終わり、隆武帝も清軍に捕らえられて絶食の末に自決、父・鄭芝龍はこれ以上の抵抗運動は成功の見込み無しとして清に降った。父が投降するのを成功は泣いて止めたが、芝龍は翻意することなく、父子は今生の別れを告げる。成功は父の勢力を引き継いで台湾に拠り、明の復興運動を行い清に抵抗したため、芝龍は成功の懐柔を命じられるが、成功がこれに応じなかったため、謀反の罪を問われて、1661年に北京で処刑されたという。

抵抗運動の継続

その後、広西にいた万暦帝の孫である朱由榔（しゅゆうろう）が永暦帝を名乗り、各地を転々としながら清と戦っていたので、鄭成功はこれを明の正統と奉じて、抵抗運動を続ける。そのためにまず厦門島を奇襲し、意見の相違する従兄弟達を殺す事で鄭一族の武力を完全に掌握した。

1658年（明永暦十二年、清順治十五年）、鄭成功は北伐軍を興す。軍規は極めて厳しく、殺人や強姦はもちろん農耕牛を殺しただけでも死刑となり、さらに上官まで連座するとされた。

意気揚々と進発した北伐軍だが途中で暴風雨に遭い、三百隻の内百隻が沈没した。鄭成功は温州で軍を再編成し、翌年の三月二十五日に再度進軍を始めた。鄭成功軍は南京を目指し、途中の城を簡単に落としながら進むが、南京では大敗した。

台湾占拠

鄭成功は勢力を立て直すために台湾へ向かい、1661年に台湾を占拠していたオランダ人を追放し、承天府及び天興、万年の二県を抑え澎湖島には安撫司を設置して本拠地とするも、長年の過労からか

病を得て志半ばにして翌年に死去した。その後の抵抗運動は息子の鄭経に引き継がれる。鄭経は鄭成功の長男として生まれる。1661年に父・成功が台湾を攻略した際には廈門の留守を預かっていた。翌1662年に父が没した後、後継者を巡り在台湾の政権幹部らが擁立した叔父（鄭芝龍の五男）鄭襲と争ってこれを破り、鄭氏政権を継いだ。1663年には父を祀る鄭成功祖廟を現在の台南市に建立している。

国共内戦に破れて台湾に敗走した中国国民党にとって、いきさつの似ている鄭成功の活躍は非常に身近に感じられており評価が高い。中華民国海軍のフリゲートには成功級という型式名がつけられている。

歴史上の鄭成功は、彼自身の目標である「反清復明」を果たす事無く多恨の生涯を閉じ、また台湾と関連していた時期も短かった（鄭政権として二十三年間）が、鄭成功は台湾独自の政権を打ち立てて台湾開発を促進する基礎を築いたことも事実である為、鄭成功は今日では台湾人の不屈精神の支柱・象徴（開発始祖）として社会的に極めて高い地位を占めている。台湾城内に明延平郡王祠として祀られており、毎年四月二十九日復台記念式典が催されている。

鄭成功と徳川幕府

鄭成功軍は南京を目指し、途中の城を簡単に落としながら進むが、南京では大敗した。鄭成功は帰郷後、たびたび日本刀具の入手方法を探っていたがなかなか良い方法が見つからなかった。そこで、鄭成功は徳川幕府に、救援部隊三千と鎧兜、弓矢等の武器を要請し、二代将軍徳川秀忠もそれに応じて数度に亘り幕議を開いた。しかしその最中、長崎から飛報がやってくる。清軍により福建・福州が陥落したとの知らせである。福州といえば、鄭軍の根拠地の一つである。根拠地を落とされた敗色濃厚な鄭成功に加担しても意味がない。そう考えて幕府は援軍を送ることを中止した。また、徳川幕府には、明朝に加担して清朝の恨みを買うのには、些か抵抗もあったのである。それには過去の因縁が関連していると言う。

豊臣秀吉全盛の頃、日本軍は明軍と朝鮮半島で激闘を繰り返していた。（文禄・慶長の役）その時、清（当時は後金）の首領・ヌルハチは再三、明朝に要請し、清八旗・三万の兵士を明軍の一翼として出撃させて、日本軍との交戦を願い出たが、許可されなかった。二代将軍徳川秀忠がそのような内情を知るよしもなく、秀忠は清が、日本のことを思い出撃をとりやめたと考えていたようである。

また、ヌルハチの後継者となったホンタイジ（清朝初代皇帝。太宗）は、遠交近攻の政策を取ったために、隣国朝鮮は徹底的に攻撃しても、日本に対しては融和政策を取っていた。その結果として、徳川幕府は清朝に対して敵対意識はないところか、むしろ好感さえ持っていた節さえあるのである。

たとえ日本人を母とする鄭成功でも、所詮は明朝の遺民であり、明朝の片棒を担いで、清朝の恨みを買う必要は無いと考えたことが援助を控えた主な原因と思われる。また、当時の徳川幕府は鎖国政策を固めつつあり、国力を浪費する海外出兵は選択肢になかったのも理由の一つと考えられる。

公式な援助を断られた鄭成功は、裏から手を回すことを考える。因みに、家光と鄭成功は年一つ違いで同世代であったので親近感を有していたとされている。鄭成功は、このままでは、偉大にして崇高な中華の国が禽獣（満州族）の国になってしまうと、徳川幕府に援軍を依頼した。

その内容は、「お互いに親密な関係を造りたく存じます。我が軍には、丈夫な兜がなく、戦うたびに兵力を損耗します。日本の兜は世界中が羨むものであり、弓矢を防ぐこと金鉄や医師のようです。

伏してお願い申し上げます。できれば交易をして、兜を二百ほど我が軍の精鋭に配り、堂々と敵軍を打ち破りたいと考えております。もし、勝利することが出来ましたら皆日本に大いなる感謝をしましょう。明王朝の仇を討ちたく思います」という切実極まるものだった。その回数は合計二十三回（1645～1686年）に及ぶ。ことに第四回目のものであることは、徳川御三家が派兵に積極的で、特に家康の十男であり戦国の気風を有して豪気で知られた紀州徳川家の当主頼宣は「天下に浪人を募ったらすぐに十万人ぐらいは集まるだろう。自ら総大将になって攻め入り、日本武士の手並みを見せてやろう。あぶれている浪人対策にもなる」と大乗り気であったが、幕閣は頼宣を警戒していたとされる。由井正雪の慶安の変の黒幕説もあり幕閣からは何かと問題にされる人物でもあった。鄭成功の不幸であった。

その後、幕閣が検討を重ねたが、ちょうど内政に多くの困難な事案を抱えており正規に派兵をするというところまでには至らなかった。また、明との関係もある薩摩においても援軍の準備がなされ、やる気満々であったが、出兵には至らなかった。

しかしながら、日本には、巷に浪人が余っており、由比正雪の乱が起こるなどしていた時期で、彼らが自発的に傭兵として鄭成功軍に馳せ参じた。その数は数千人に及んだという説もある。日本側は清への手前、公式に援助を行なうことが出来ないため、鄭氏の交易利権（長崎貿易）を黙認することによって間接的に援助した。

日本武士は甲冑に身を固め、頬当を付け、三人一組で戦い、鉄人と呼ばれ恐れられた。一人が大盾を持ち、その後ろで長刀を持った一人が馬の足を払い、さらに一人が刀で落馬した兵を切り殺したという。さすがの韃靼騎馬兵（満州族）もこの日本武士の訓練された巧妙なチームワークの前に屈したので、鄭成功軍は陸戦でも優位に立ったという。

鄭芝龍

1604年、福建省南安市に生まれる。18歳の時に父が死亡し、母方の叔父を頼りマカオに赴き、黄程の元で経済学を学ぶ。この頃、カトリックの洗礼を受け、Nicholas という洗礼名を授けられる。西洋の文献には、Nicholas Iquan（ニコラス・一官）と記されている。

1621年には、台湾や東南アジアと朱印船貿易を行っていた中国系商人の李旦、または、顔思齊の傘下に加わる。日本の肥前国平戸島に住むうち、平戸藩士田川七左衛門の娘であるマツと結婚。後に、息子の鄭成功が生まれている。

1624年には活動拠点を日本から台湾笨港（現：北港付近）に移した。1625年、リーダーである李旦か顔思齊の死亡により、彼の船団を受け継ぐ。船団は千隻もの船を保有して武装化を進めるなど海賊としての側面も有していた。台湾南部にオランダ人の入植が始まると、妻子を連れて中国大陸へと渡る。当時、福建省周辺でもっとも強い勢力をもった武装商団となる。

1628年、福建遊撃に任命され、李魁奇、鐘斌、劉香などのかつての仲間たちを征伐する。福建省に早魁が襲うと、移民を引き連れて台湾へと向かい、豊富な資金援助を持って、開拓を進めた。

当時、台湾南部はオランダ東インド会社が統治しており、オランダとの国際貿易で巨万の富を築いた。1644年には亡命政権である南明の福王から南安伯に封じられ、福建省全域の清朝に対する軍責を負う。

1646年には黄道周（明への忠誠心が強く、清への降伏を拒絶したため南京にて処刑された）との

対立などで南明政権から離れる。この時、意見の違いから子の成功らとも別れ、清朝に降伏する。成功は父の勢力を引き継いで台湾に拠り、明の復興運動を行い清に抵抗したため、芝龍は成功の懐柔を命じられるが、成功がこれに応じなかったため、謀反の罪を問われて、1661年に北京で処刑されたという。

李自成

中国明末の農民反乱指導者。明に対して李自成本の乱と呼ばれる反乱を起こして都北京を陥落させ、順王朝（大順）を建国して皇帝を称したが、清軍を引き入れた明将呉三桂（山海関の守将）と清の連合軍に敗れて、李自成は西安、通城（現在の湖北省）と相次いで逃れるが、永昌2年（1645年）、九宮山にて現地の農民の自警団により殺されたとされるが、生存説もある。李自成軍の残党は、南明の傘下に入って清朝への抵抗を続けたが、南明の滅亡に運命をともにした。

農民反乱

明は駅站と呼ばれる駅伝制度を敷いていたが、崇禎帝の代に経費節減のために廃止された。駅站廃止によって失業した者たちは路頭に迷い、農民反乱を起こすことになる。延安府米脂県（現在の陝西省）出身の李自成もその中の一人であった。天啓7年（1627年）・崇禎元年（1628年）に陝西で起きた大旱魃をきっかけに反乱が頻発し、李自成もそれに参加した。その間の朝廷は満州族対策に追われて満足に反乱対策を行えず、これに乗じて反乱軍は勢力を拡大し、山西を制圧し、北直隸（河北省）まで迫るほどになった。その後、官軍の反撃により押し返され、河南へと移動する。この時期の反乱軍首領は高迎祥（こうげいしょう）であり、その下に張献忠（ちょうけんちゅう）などがいた。李自成は高迎祥配下の武将の一人に過ぎなかったが、この時の作戦会議「滎陽（けいよう）大会」で官軍に対して全軍が協調して当たるべきだと発言して注目され、さらに翌年には官軍に捕らえられて刑死した高迎祥の後継者となり、高迎祥が名乗っていた闖王（ちんおう）の称号を名乗り、反乱軍の首魁となった。ただし「滎陽大会」は清初の書物で創作された伝説上のものであり実際になかったとの説もある。

しかし、高迎祥の死によって反乱軍の勢いは弱まり、李自成たちは官軍の追及を逃れて陝西へ退却し、さらに山野に隠れざるを得なくなった。これを見て李自成軍の勢力を軽視した官軍は湖広（湖北省・湖南省）へと移動していた張献忠軍征討に注力、これによって李自成軍は息を吹き返し、河南を落とした。この地で挙人（明・清では科挙のうち、郷試に合格した者を指す）の李巖と出会い、「均田」（耕地の平等な分配）と「免糧」（当面の間、租税を免除する）の二つのスローガンを李巖から提案され、このスローガンと厳正な軍規により農民の支持を集め、一気に数十万の軍勢に膨れ上がった。しかし、李巖も今日では清初の小説で創作された架空の人物とされている。また、牛金星ら知識人を陣営に取り込んでいく事になる。この勢いに乗って、崇禎14年（1641年）には洛陽を陥落させ、この地にいた万暦帝の三男の福王朱常洵を殺害した。福王は万暦帝に溺愛され、その贅沢により多額の税金が浪費されたために民衆の恨みを買っていたのである。

新順王を名乗る

さらに進撃を続けた李自成は開封を落とし、崇禎16年（1643年）に襄陽にて大元帥、続いて新

順王と名乗って六部などの国家としての制度を整え、さらに西安を陥落させた。翌崇禎 17 年（1644 年）に西安に入った李自成は国号を順（大順）、元号を永昌と定め、この地で順王を称した。

2 月には李自成軍は北京を目指して北伐を開始し、同年の 3 月に北京を陥落させて崇禎帝を自殺に追い込み、明を滅ぼした。李自成の軍が北京城に入城した際には、市民のみならず官兵まで崇禎帝を見捨て、隊列をつくってこれを歓迎したという。

北京に入城した李自成たちはここでいよいよ中国全土の皇帝となるための諸手続きや儀式の用意を始めた。入城後の李自成軍は殺人鬼として有名な張献忠の軍が合流したこともあり、厳正であった軍規もすっかり緩み、略奪・強姦・殺人が横行していた。その頃、東北地方では満州族の清に対して前線の拠点である難攻不落と称された山海関を守っていた呉三桂が清に投降していた。呉三桂は精兵を率いていたので明朝からは北京防衛に來援するよう指示されており呉三桂も兵を率いて北京に向かっていたが、途中にて北京陥落を聞き、山海関に引き返した。山海関において、西から李自成がしきりに呉三桂に投降を呼びかけ、東からドルゴン率いる清軍が迫っており、呉三桂は窮地に立ち、迷った末に最終的にドルゴンに山海関を明け渡し李自成を討つためにドルゴンの協力を求め、北京へ向かうことになる。

李自成軍はドルゴン率いる清軍と呉三桂等明遺臣の連合軍と激突し大敗、北京から撤退した。北京入城から 40 日と言う短い天下であった。さらに、李自成の参謀的役割を果たしていた李巖と牛金星の確執から牛金星が李巖を殺害して清軍に投降した。その後、李自成は西安、通城（現在の湖北省）と相次いで逃れるが、永昌 2 年（1645 年）、九宮山にて現地の農民の自警団により殺された。ただし、僧侶に変装して康熙 13 年（1674 年）まで生き延びたと言う伝説もある。生き残った李自成軍の残党は、南明の傘下に入って清朝への抵抗を続けたが、南明の滅亡に運命をともにした。挙兵してから天下を握るのも早かったが滅亡も早かった。飢饉といひ雑多の軍の集合体でもあったことから、李自成自身の志と異なり、悲運の最期を迎える辺りはどことなく木曾義仲に似た面があるように思われるのである。

北京に入った清は崇禎帝の葬儀を手厚く営み、李自成によって殺された崇禎帝の仇を取るとの名目を持って自らの漢地支配を正当化した。このために清代を通じて李自成は反逆者とされ、辛亥革命によって清が滅亡した後もしばらくは、単なる流賊の頭とみる低い評価が続いたが、1944 年になって郭沫若が李自成を起義軍として再評価する論を唱えた。毛沢東も当初は流賊説を取っていたが、郭沫若の論を承けて李自成を農民反乱指導者として評価する見解を出したことから、李自成の再評価と順朝の研究が進められるようになった。清軍を引き入れその先導を務めた呉三桂についても売国奴と蔑む見方もあり評価は分かれるところである。呉三桂は清王朝では功臣として優遇され明王朝の残党狩りで活躍したが、後に所領継承問題を巡り清王朝と対立し遂には三藩の乱を起こすに至る。

呉三桂と三藩の乱

平西王として雲南に割拠した呉三桂、平南王の尚可喜（しょうかき）、靖南王の耿仲明（こうちゅうめい）は三藩と称され、強大な軍閥として清の従属国というよりはほぼ独立国のような存在であった。

三藩は領内の官吏任命権を有し、軍事、行政面で北京の朝廷と完全に一線を画していた。特に呉三桂は清から毎年莫大な軍事費を支給され、チベットとの貿易や鉱山開発、銅銭の私鑄などにより巨利

を得ていた。中国全土の直接支配を企図する康熙帝こうした三藩の存在を問題とし三藩を抑える行動に出る。

康熙 12 年（1673 年）、尚可喜が故郷の遼東への帰郷と子の尚之信（しょうししん）への藩王継承を申し出たが、それに対する康熙帝の答えは尚可喜の帰郷は許すが藩の廃止を要求するという厳しいものだった。藩王の世襲を当然と考えていた呉三桂及び耿精忠（耿仲明の孫）は驚き、すぐに清に藩の廃止策の撤廃を請求したが、康熙帝の答えは変わらなかった。憤慨した呉三桂は清への従属をやめて独立の意思を表明、周王、後に天下都招討兵馬大元帥を自称して清の領内への侵攻を開始した。謀反であった。

当初は呉三桂率いる周軍の快進撃が続き、尚之信や耿精忠や陝西提督王輔臣、広西將軍孫延齡が清に背き、台湾の鄭經（鄭成功の嫡男で跡を継いでいた）も反乱に呼応した。しかし三藩や他の有力者が謀反したといってもその足並みは揃わず、呉三桂の掲げる「女真族を追い出し漢民族の国を建てる」という大義も、自身が女のために清軍を引き入れたという風説、明の末裔である桂王を殺したという悪評を考慮すると世間を納得させられず民衆の支持を得られなかった。一時は長江以南を制圧した周軍も、漢人が主力となった清軍の反撃により、康熙 15 年（1676 年）に尚之信が、康熙 16 年（1677 年）に耿精忠が清に降伏し呉三桂は孤立した。康熙 17 年（1678 年）3 月、呉三桂は形勢逆転を狙ったかそれとも死期を悟り観念したか、湖南の衡州（湖南省衡陽市）で帝位に就いた。国号を大周とし、元号を昭武と定め、新王朝の建国を宣言した。しかし同年 8 月に崩御し、孫の呉世璠が二代目皇帝として帝位を継承した。しかし、呉世璠は清軍の攻勢により次々と拠点を失い洪化 4 年（1681 年）に逃れた昆明が清軍に陥落されると首を吊って自害し、大周は滅亡した。この前後に平南王尚之信、靖南王耿精忠の両藩も取り潰され、三藩の乱は鎮圧された。康熙 22 年（1683 年）には台湾の鄭氏政権も清に降伏、こうして清の中国への直接支配体制が完成したのである。